

シリーズ[§]『青松』を読む[§]⑥

手づくりで伝える¹⁾

——国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて——

阿部 安成

series[§]『青松』を読む[§]①手づくりで始まる、wps243、2015.12

series[§]『青松』を読む[§]②手づくりで詠む、wps244、2016.01

series[§]『青松』を読む[§]③手づくりで偲ぶ、wps250、2016.04

series[§]『青松』を読む[§]④手づくりで悼む、wps251、2016.04

series[§]『青松』を読む[§]⑤手づくりを保つ、wps255、2016.07

2015/4/5 瀬戸内海に霧

第8号 題字（「青松」）も号数（「第八号」）もともに右から左への横書き、表紙右端^{おもて}に縦書きで「二〇．五．一五日」の文字、その左に、松と島と帆船の絵がある。島は、大島西海岸からみえる矢竹島か弁天島か。表紙絵は、本号が初めてとなる。1945年5月15日発行とおもわれる『青松』第8号である。

「目次」は、土谷勉「短篇小说 春菜」、井上真佐夫「ビルマ通信を拝見して」、斉木操「随筆 故郷への道」、浅野繁「武田祐吉著 万葉集新解」、同「短歌 ドイツ敗れたり」、小見山和夫「〃〃 玉歩」、綾井譲「〃〃 雑詠」、笠居誠一「短歌及長歌」、泉俊夫「短歌 敵機ほか」、喜田正秋「自句自解」、同「俳句作品」、大原枝風「〃 〃」、松田美津夫「長詩 靈波はおどる」、笠井誠一「短詩 空」、泉俊夫「〃〃 涙」、〔判読不能〕作品 松本常二—大西哲二—畠山一義—戸田次郎／岡崎安彦、中島徳吉、中井八千代／須内キヨカ、庫元久子。

1) 本稿は2016年度日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究C「20世紀日本の感染症管理と生をめぐる文化研究」（JSPS 科研費 26370788、研究代表者石居人也）の成果の1つである。

穂波生の「島庵独語」は休載か。

五月の言葉 「目次」になかった、村上華岳「五月の言葉」は、このときすでに歿していた日本画家の文章を引用したページである。「私の画は実につまらない」と、果てのない「芸術」をめぐる「良心」の「苦し」みが綴られている。巻頭言を省いてこの文章をおく編集は、担当者の好みか。

短編小説 土谷勉の稿「春菜」は「短篇小说」だという。始まりは、「とても好いお天気。洗濯物が音たてゝ干きさうです。水槽の面が軒裏に反射してゆらゆらゆれる。島山の斜面も負けずに輝く。雑木の若芽でせうか。頬白も^な曇いてゐるやうです」と、初夏をむかえた「島山」の描写。「井戸端」で「菜を洗つてゐる」「快活な娘さん」が登場——「ほんとにおいしさうね」／「さうよ。とてもやはらかで…」／ほとぼしるポンプの水先もさすがに五月である。少しも冷々しくない。清冽である。新鮮な野菜を洗上げる弘子さんの手首が桃色にほんのり透いて見え、病気とはいへとても健康さうで美しい。も一人は片手に繻帯を巻いてみて、病気もかなり重い。濡らすまいと気を遣つてゐる」と、場面は、やはり、療養所のなかだった。そこに「私」があらわれ、ふたりに声をかける。「弘子さんの顔も吉子さんの顔も明るく楽しさうである。私は自分の裾分けした一握りのまづい春菜が、こんなにも喜んで貰へるかと思へば無性にうれしかつた」と語る。園内での野菜づくり、その供出、「主食も副食も六百人分一緒に煮て、一様に湯気の立つのがいたゞけるのは有難い療養の園内生活なればこそであつた」こと、など園内の実相を描いたようでもある。

「病気もかなり重い」とあらわされた吉子さんは、ていねいに春菜を洗う。「作物は^{ひとくき}一茎、^{ひとは}一葉といへども限りない天地の恵みによつて伸び、しかも耕作者の汗と脂がこめられてゐる。粗末にされると痛々しく思はれ、百姓の目に作物は吾が子のやうに可愛いものだ」といった記述は、前号に載った土谷の稿「百姓の話」を想起させる。「まだやつと^{はたち}二十歳そこいら」のふたりをみて「私」は、「ふと故郷の妹を思」い、「その次に弟のお嫁さんを聯想した」。そして、「時局がどんなにきびしくなろうと、吉子さんなら負けずに日々をたのしく戦ひ抜くだらうと思つた」と記され、その晩に畑で夏大根を抜いて、「三本別にした。こ

つそりと吉子さんだけに食べて貰ひたかつたからである。セルロイドの赤い櫛と共に病気の重い吉子さんが、私には忘れられぬ可愛い人になつてしまつた」と閉じられる短編小説である。

とおしのページノズブルが、①から⑫まで。

帰省 土谷の稿は、名まえが記されていたりなかったりする「大島療養所薬局」「大島青松園薬局」の名が印刷された「内用薬」票の裏に謄写版で刷られた原稿用紙が用いられている。その票に紙片が貼られ、そこに「勉」の署名があつたり「土谷」の押印があつたりする表題「潮音」の稿がある。土谷の連載稿だが、この号の「目次」にそれは見えなかつた。

「春菜」稿⑥裏面の「潮音」は――

一月以降の一時帰省者が三十六人。そのうち梨の礫が八人。三割である。こんなことでは先が案じられる。何とかしなければならぬ。世話になりつばなしで後足で砂をけつて立つこれらの人々に対し今度から供託金制度が設けられることになつた。五十円人事部に供託するのである。帰りさへすれば問題でない。この場合ぜひ帰らねばならぬ金のない者には気の毒であるが、それはそれとして療養のあけくれにも信用といふことが大切であり、戦ふ日々に道義の昂揚といふことが最も希ましいのである。⑩〔手書き〕、土谷〔押印〕

この一時帰省について、たとえば、『閉ざされた島の昭和史―国立療養所大島青松園入園者自治会五十年史』（大島青松園入園者自治会編、大島青松園入園者自治会（協和会）発行、1981年）「第四章 諸行無常」の「9、祖国浄化の無頼^{ぶらい}県運動（昭和一六、一七年）」「10 腹がへつても戦がつづく（昭和一八、一九年）」「11 みどりの松がうらめしい（昭和一九、二〇年）」において、第1の節に、「当時の在園者数は六九三名と最高で、所長のいう定員七〇〇名は目前であつた。このうちから一カ月一〇人前後一時帰省する。各県からはなるべく帰さないようにと通達がきていたが、入れるとき有無をいわず連れて来るため、後の始末も残る。まして時局柄家族の応召、戦死戦傷その他家業の手不足もあつて、一時帰省

は増えても減らなかった」と記録されている。記載の箇所からするとこれは、1941年、1942年のようすとなる。1945年の一時帰省の記録は稀有である。さきの『閉ざされた島』は参照、閲覧した史料に手書き手づくりの『青松』をあげていなかったのだから、1945年の一時帰省についての記述が同書になかったことは致し方ない。

べつに記したとおり、本誌第5号には誌面の裏紙として、1945年2月25日付の「一時帰郷嘆願書」が綴じられてあった。同年8月15日のことを療養者たちはいまだ知りようもないが、この時期の一時帰省をいまに伝える記録としてこの『青松』はある。

配給 「春菜」稿⑧裏面の「潮音」は、「十日とつぜん鱸の特別配給を役所からうけた」ことを伝える。

きくところによると、役所の方さへまだとか——。読んで字の如く鱸こそ正に春の魚である。思ひのまゝ料理して思ひのまゝに各人いたゞいたことであるが／「けふこの頃、閨値だつたら大金ぞ」／そんなことを言つて舌鼓を打つた療友こそ何といふこの世の果報者であらう。腹の虫もさぞ吃驚したことである。“鱸たべたことも母にはいつてやり”
土谷〔押印〕

もとより戦時下の食糧事情がよいはずもないが、こうした特別配給もあったわけだ。

松の花 「春菜」稿⑩裏面の「潮音」——

松の花をいたゞいて、先夜の放送における高橋先生の蔭の努力を始めて知つた、塔の高さに瞠目しても中空にそれを支へる土台石の工夫はともすると見忘れ勝である。現象にのみとらはれがちな吾々の欠点であるが、よつて以て由来する処まで深く識ることは何事の判断にも必要であるまいか、土谷〔押印〕

これだけではなにがあつたのかよくわからない。「高橋先生」とは、おそらく高橋竹代医官だろう。女性である。

防空壕 「春菜」稿⑫裏面の「潮音」——

◎横穴式防空壕構築に一般から勤労奉仕希望者を募つたところ七十九名あつた。うれしいことである。十一日からさつそく着手した。最北端から奉仕団の指揮により。／五月

十三日現在もう八尺も掘りこんだ。この分なら案外完成が早いかも知れない。年寄組が若者に負けまいと腕に縊をかけて敢闘中。土谷〔押印〕

「年寄組」とはいったい、いくつくらいの年齢層をいうのか。

林先生 井上真佐夫『ビルマ通信』を拝見しては、ビルマ戦線を云々するのではなく、「ビルマ通信」を編集した林文雄についての文章となっている。「ビルマ通信」とは、本誌前第7号の「青山荘だより」に「大島医官のビルマ病床だよりが先日葉書十八枚になって夫人に届いた。俳句百六十六句。今小生抜粋し清書して居る。近日回覧にしたいと思ふ」と林が記したそれを指し、そこにいう「清書」が整い、「回覧」となったのだろう。井上は記す――

先には、園内ラジオに依る朗読放送があつてお元気な肉声を拝聴し、又今度「ビルマ通信」を拝見して、林先生が最近大変お達者になられたことを知り非常に喜こんでいる一人であります。先生が文並に絵の筆写其他に大変御苦心されて編纂せられたビルマ通信を通して、私たちは、大島先生の最近の御様子を充分知ることが出来、又身は最前線にあつて日夜重大なる軍隊生活の緊張感を持続し、尽忠報国の雄々しい決意の中にも、絶えず内地のことを想ひ、大島のことを案じてみて下さる先生のあたゝかいみ心に親しく接する機会を作つて頂きまして、大変嬉しく感謝に堪へない次第であります。

本誌第6号巻末に貼付してあつた葉書が、ビルマ派遣部隊に属する大島新之助から療養所の「患者御一同様」に宛てた1葉だった。大島の苗字をペンネームかとわたしは記してしまつたが、大島新之助は本名だった²⁾。

大島の療養所における、医師と療養者との交流の一端を報せる記録である。

醜金 井上の稿は、「十行二十字詰」の文字と罫目が印刷された原稿用紙に記されていた。その3枚めの左半分に貼られた紙片に土谷の稿「潮音」が記されている。

◎機雷監視哨及び防空壕構築に感謝の熱誠はひきもきらぬ有様であるが、今回又特定室

²⁾ 大島はのちに1964年11月から1969年4月まで国立療養所大島青松園医務課長をつとめ、その後、国立療養所奄美和光園園長となる(『創立百周年記念誌』国立療養所大島青松園、2009年)。

一同（重特をふくむ）から涙ぐましい醸金があつた。醸金箱が各部屋を廻つたのであつて、十六日感謝と激励の手紙を添へ、議長から総代の許に届けられ、即日聯合奉仕団に手交された。／総員二四〇名（男、一二八、女一一二）／内訳、五円札一枚、五十銭札二九枚、／十銭札一二七枚、十銭貨一三枚、／五銭札八〇枚、五銭貨一二枚、／一銭貨二〇枚、／総計二一八円三一銭也

重篤（か？）をふくむ「特定室一同」から「涙ぐましい醸金があつた」とは、奉恩や報国が困難なそうしたものたちも防空などの防御を支えているとの謂なのだろう。

父 齊木操「(随筆) / 故郷への道」は、その末尾に「五月十日午後記」と示してある。冒頭の1文が、「父を喪つた悲みはたとへ様もなく深く、大であつた」と始められたとおり、これまでの本誌でも記されていた父への想いがここにもある。そのつぎの行――

突然、訃報に接して驚愕と絶望に打ちふるひ、忍び嘆くに堪へず密かに浜辺まで涙を捨てに出た私であつた。

とつづく。引用者が引いた下線部は、原文では赤インクの線となる。これまた齊木がのちにみずから追記した傍線か抹消線だろうか。

齊木はいう――

父は私にとり、一種の信仰の対象の如きものであつたことを、私はその死に直面して沁々感じつゝ「愈々俺も孤独になつた。」といふ侘しさがひしひしと身に迫つて来るのであつた。

その父の「青年時代（若連中と云つたそうだ）」はというと――

活花やら、武芸、文芸等と柄にもなく粹な趣味に通じてゐた名残の品々を庫の隅等に散見し、「喜撰」「喜撰」と何時迄も友達間に呼ばれてゐた綽名は和歌の雅名であつた事を十六、七の頃初めて識つた私は、如何にもコッケイなハイカラ屋としての父の姿を相像してふと微笑を禁じ得なかつたものである。（私が文芸に興味を持つ様になつた動機はこの父を真似たい童心からだつた）

とかえりみられ、いまある自分とかつての父とが強くむすびつけられたのだった（「今の私

は父につながる無限の想出を追ひつゝ)。

その父の死後、「主な家は糸の切れた凧同様、全く途方に昏れてゐるであらう。／私は無能ながら新しい戸主として、家庭を想ひ、身を思ひ、千々に碎くる胸の中も秘して強く家族に呼び懸けんとしたのであつた」ところ、それから二か月後に妹（「(幸子 20 才ヨリ)」との赤インクによる追記あり) からきた葉書には、航空隊の弟も帰らず、大阪の叔父一家、従妹の家族が疎開してきたため三世帯が住むこととなり、「甚だ申兼ねますがこの人達が他へ移るまで他人が居りますので其方からの便りは当分遠慮して下さいと母が申してゐます」とあつた。笠居は記す――

療養所に十年を過ぎた今では入園当初のやうに一途な焦れ様はなくも、矢張り心の奥底に絶えず故郷へのつながりを蔵つてゐるのが、私達の真相であつて、斯くなつた以上最早、手紙に依る意志の交流だけが私には有一の希望であつたので、この報せは一時私を絶望の淵まで突き落してしまつた。／唯一人文通を交してゐた少年兵の弟も最近作戦任務に就いたらしく二ヶ月程前から音信不通となつたし、私は最早総ての肉身に見放された虚しさがたまらなかつた。／矢張り父は良かった――、長男と頼む信念を捨てず絶えず家の仔細も洩らさず相計る風に報らせて呉れたものを……と返らぬ繰言を又づぶやく私であつた。

こうした心境を斉木は戦時という時世とつなげて記す――

然し私は翻つて思ふのである！！／これが今日の決戦の様相であらう。／遂に滅亡し去つた独逸を想ふ時。――／絶間なき警報の発令を聞きつゝ、敵数目標の来襲の繰返し繰返し絶ゆるなきを思ひつゝ、これがなんだ。之位いの私事など唯徒らに泣き昏れてよからうか……／今は日本人の誰もが斯く共通の運命にあるのだ。／紅顔の少年にして一度び翔てば其の双肩に皇国の隆替を念じ莞爾と笑み、悠久の大義に殉じて征く今日である。／それを汝如何なるとて、彼の少女の如く一片の感傷にのみ涙して満ち足るべきぞ！

ここでは、戦時下という現状を逆手にとって、実際には発病によつてもたらされた自己の不遇を、戦時下ゆえの等し並なのだと、一般化したのである。

病者として、榮の赤子たるの自覚こそ今より痛感せらるなき今日この秋、如何にせばより崇く、より大きく祖国に尽し、祖国に殉ずべきかを思念し止まぬばかりである。最後に「男子我れ、今日のこの秋起たずして何時の日起つべしや」と称してこの稿を終る。との気概がみせられて稿が閉じられた。

このとき斉木は、「「虫様突起炎」で絶対安静を申渡されてみたの」だが、「今日午前中診察の結果ほゞ快癒との事に付き急に思ひ立ち筆を取」ったと「附説」された。

その裏面 二つ折4枚となっていた斉木の稿の裏面は、謄写版刷りの文書となっていた。ページノンプルは、18、19、26、27、28、29、24、25、となっている。規約類を冊子体にまとめたその一部のような。ページの順に記そう（原文の漢字カタカナを転載にあたって漢字ひらかなとした）。

18 ページ、19 ページ――

指定団体細則／第一条 教化演劇音楽運動趣味等の向上発展に奉仕する目的を以て組織する団体を指定団体と称す／第二条 指定団体は総代之を管理し其承認又は取消しは評議員会の議を経て之を行ふものとす／第三条 指定団体は左の諸項を具備するを要するものとす／一 一定の手続を経て自由に団員たり得ること／一 第一条の趣旨に依る修養奉仕の団体たること／一 規約の改廃並役員を選任に関し総代の承認を必要とする団体たること／第四条 指定団体の事業は総代の承認を経て之を行ふものとす／第五条 指定団体にして助成費を求めんとするときは毎年度始めに於て事業の大要及其経費を総代に提出するものとす〔改ページ〕

第六条 指定団体の事業にして有益と認めたるときは総代は評議員会の承認を経て其経費の一部を助成することを得／第七条 総代は必要と認めたるときは評議員会の承認を経て協和会の事業の一部を指定団体に委託することを得／但 委託したる事業は指定したる経費の範囲内に於て之を行ふものとす／第八条 指定団体は助成費を受けたる場合は年度末、委託事業費を受けたる場合は其事業の終了と共に決算書を作製し総代の承認を求むるを要す／第九条 総代は協和会の備品の一部を指定団体に貸与し之を保管せし

むることを得／第十条 指定団体代表者は総代統督の下に庶務部主任の旨を享け所属団体を統裁するものとす／第十一条 指定団体代表者は毎年度末団員名簿及事業経過の概要を総代に報告するものとす／第十二条 本細則に依り其指定を得んとする団体は名称規約事業役員及団員等を具して総

この「指定団体」制度については、さきに参照した『閉ざされた島の昭和史』の、第4章「諸行無常」（1941年～1945年）、「各種団体の変遷と現況」、「協和会会則」、「自治会・青松園関係（一九〇九年～一九八〇年）」のどのページにも記載がない。

24 ページ、25 ページ――

図書閲覧細則／第一条 新聞、雑誌、書籍等は所定の場所に於て閲覧するものとす／第二条 雑誌、書籍等を携出借覧せんとするときは左の要項を整理人に申出づるものとす／一 借覧希望図書名／一 借覧者の室号及氏名／一 借覧期間／第三条 借覧期間満了のときは直に整理人に之を返済するものとす／第四条 書籍を汚損し又は破棄紛失したる場合は弁償せしむることを得〔改ページ〕

会計細則／第一条 本会会計は之を普通会計と特別会計とに分ち特別会計に大島神社特別会計及互助基金特別会計を置く／第二条 金銭の受授及保管は会計部主任の責任に於て之を行ふものとす／第三条 予算及決算は款項目に分ち収支を明かにするものとす／第四条 金銭の支払は左の手續に依るものとす／一 各部主任は月日、受取人、金額、摘要、予算基礎を記載せる支払請求書を総代の決裁を経て会計部主任に移牒すること／二 各部主任は前項の支払請求書に依り支払伝票を作製し之を受取人に交付すること／三 受取人は交付せられたる伝票と引換へに会計部主任より現金を受取ること

26 ページ、27 ページ

第五条 金銭の受入は左の手續に依るものとす／一 各部主任は月日、受入先、金額、摘要、予算基礎を記載せる受入請求書を作製し総代の決裁を経て会計部主任に移牒すること／二 会計部主任は右請求書に基き金銭を受入れること／第六条 支払伝票は特定の用紙を使用し個人、室別、団体別に之を発行するものとす／第七条 金銭と引換へた

る伝票は一ヶ年間会計部主任之を保管するものとす／第八条 本会の財産は有利且確實なる方法に依り之を保管するものとす／第九条 普通会計及特別会計に於ては金銭の出納簿其他必要なる諸帳簿を作製し収支を明かにするものとす／第十条 備品は詰所及各部毎に備品台帳に登録し会計部主任及各部主任之を整理保管するものとす／第十一条 本会の役員及教師は月手当、作業人は日手当とし、作業奨励金下附日毎に之を支給するものとす〔改ページ〕

但 名^{〔マ〕}挙職役員の謝礼金は之を年度末とす／第十二条 総則第十九条に依る慰労金は総代の必要と認むる場合其都度之を支給するものとす／第十三条 総代は各部主任の請求に基き会計部主任をして金券を発行せしむることを得／第十四条 金券を發行せんとするときは其種類、用途、発行総額等を定め評議員会の承認を経るを要するものとす／第十五条 金券に関する帳簿は別に之を定むるものとす／第十六条 金券は回収せられたるときを以て収入とし其相当額を普通会計に繰入れ記帳するものとす／第十七条 前条の手續を完了したる金券は之を棄却するものとす／第十八条 発行したる金券は所持者の請求に応じ現金に換ふることを得／第十九条 発行したる金券にして前条に依り現金と交換したる場合は之を発行数より減するものとす

28 ページ、29 ページ

第二十条 毎年度末に一定の時期を劃し発行したる金券を回収し決算するものとす／第

第二十一条 前条に依り生したる剰余金は普通会計の雑収入に繰入れるものとす／第二十

二条 現金の受入及支払に関し厘位は之を切捨つるものとす〔改ページ〕

予算細則／第一条 総代は予算編成に先たち協力会を召集し予算編成に関する意見を聴取するものとす／第二条 各部主任は毎会計期間の始に於て収入及支出の予算調書を会計部主任に提出するものとす／第三条 会計部主任は前条の調書につき各部主任と協議し総代指示の下に予算案を作製するものとす／第四条 予算案は評議員会に附議し其議決を経て協力会に報告するものとす／第五条 決算は予算に准し之を作製し評議員会の承認を経て協力会に之を報告するものとす／第六条 予算は之を収入予算と支出予算の

二部に分つものとす／第七条 収入予算の款項は之を左の如く定む

——大島の療養所における自治など在園者の活動については、ひとまず、さきの『閉ざされた島の昭和史』に記録されてはいるものの、まだわからないことが多い³⁾。ここで裏紙となった藁半紙の文書は、もともとは謄写版で複数の部数が刷られたらうから、その余分が反故とされ裏紙に活用されたのだろう。これらもまた過去を知る大切な手がかりとなる。

浅野 「万葉集新解／武田祐吉著／大伴家持」は、前号につづく浅野繁のペンとなる。「目次」に執筆者名があつたが、本文に署名はない。

浅野による「短歌作品／“ドイツ敗れたり”」がつづく——

大いなる理想もあはれ遂にしも武力に潰え何を頼めむ／ふたび、潰え去りにけるゲルマンの民族のその果てを想ふに堪へず／生きてはた何を頼めぞ敵国に降りし民族のこゑ聴かなくに／軍門に遂ひに降りしか土の面にふみにじられし花びらのいろ／年ひさに口になじみしひとの名をつぶやきつつし因もあらぬか

「日本標準規格 A4」の文字と罫目が印刷された四百字詰原稿用紙の裏にもう 1 首——「降伏はさもあらばあれ国とともに殪れし兵になにと告げむぞ」。同盟国の敗戦に意気消沈か。

小見山 「短歌」／玉歩」と題された小見山和夫の作詠が載る——

戦災地に運ばせ給ふ玉歩かも大御心は申すもかしこ／戦災者に垂れさせ給ふ御仁慈を勅語に拝す涙たりつつ／盲爆の跡に明るき陽は春を玉歩迎へまつる都民は伏して／わたくしを捧げまつらむさきはひは祖々ももちし受継ぎにけり／奉祝天長節／み光に洩るるものなき佳き日今日の眼にかがよふは若葉かへるで／最後の一首特に眼につく

最終行の感想は林のペンか。

「十行 廿字詰」「コクヨの 165 規格 A4」の文字と罫目が印刷された原稿用紙。

綾井 そのつぎに綾井讓の 4 首——

³⁾ 自治活動にかかわる文書については、ひとまず、阿部安成「療養所における「自治」論の始線と史料の現在—大島青松園をフィールドとして」(『隔離の百年から共生の明日へ—ハンセン病市民学会年報 2009』ハンセン病市民学会、2010年)、阿部安成、石居人也「香川県大島の療養所に展開した自治の痕跡—療養所空間における〈生環境〉をめぐる実証研究」(『滋賀大学環境総合研究センター研究年報』第10巻第1号、2013年)を参照。

皇がため惜しむ命にあらねども病みてはすべな散るに咲かむに／ぬばたまの夜径に匂ふ
 藤の花房ながければ掌にうけて香ぐ／白藤の花を咲かせて人棲めり昼夜わかたず敵空に
 あり／死に近き人もしばしば瞳をあけて敵来襲の情報をさく

その裏には、「海行かば水漬く屍を／久方の空行く／我は白雲と散る／若桜隊／中瀬一飛曹
 ／（佐々木信綱先生推賞）」とあり。

表は、青点線による縦罫紙。

笠居 笠居誠一による「長歌」と「反歌」——

皇の わが大君の 楯として 敵撃滅に雄々しくも いやつぎつぎに 神風と 空の猛
 雄は 征き征きて 南西諸島の 敵艦に 轟撃沈の体当り 戦果は揚る 大報道 純忠
 無比の神鷲の 勲を想ひ 広前に 慎しみ祈る 夕空を 爆音高う 特攻機飛ぶ／反歌
 ／広前に戦勝を祈る夕昏れに爆音高う神風機飛ぶ

この時期、笠居も気を殺がれつつあるか。

その裏には 54 のノンブルが唐突に入るので、54 のこれは反故か——

空の神兵／輸送機ゆ降下にうつる際にして兵の心は既に神なる／青波のうねりを越えて
 我が投げし土器沈む際を光れる

反故にしては抹消線の×がない。内容は時節にあう。

もうひとつ笠居の「楓の花」——

つゝましく 楓の花の咲く庭に 朝は下り立ち 口すゝき 手水を使ひ 日の出づる
 東に向ひ下祈る 片居の我の心深く 悲田施薬の物語り 現実に想ふ畏さや 大宮御所
 の御苑生に 生えし楓の若苗の 御下賜ありて 幾春秋 憂き悲しみに 御仁慈の 深
 きを念ひめぐり来し 身に尊としと 眼近う 仰ぐに清し 楓の花

と楓に託された皇恩への感謝。

その裏ノンブル 9 とあるページには全面に抹消線の×があり、もともとあった 3 首がみ
 える——「新しき義足の方がややかるしと思ひつゝ春の山を巡りぬ／茶毘にふす君に別れ
 をしみつゝ讚美歌唄ふ心寂かに／水桶の水に照る陽の射返りて向ふの壁に光さゆるる」。

その左ページに、「返歌」——「うらら日に匂ふ若葉のかげにして慎しく咲く楓の花／楓の花仄匂ふ庭に来て薄羽蜉蝣は風に吹かるる」、これら2首はさきの「楓の花」への返歌か。

柀目が謄写版で刷られた原稿用紙の欄外に書きこみがある。ペンは林か——「←この歌真に美しいと思ふ、たゞこの虫がどこに居るのかとんであるのかとまってあるのか不明」。これは短歌のなかで、薄羽蜉蝣がどこにいと詠まれているのかということなのか、あるいは、大島のいったいどこにその虫がいるのかといたいのか、不明。矢印は薄羽蜉蝣のうたを指す。

このページには「習作」も——「勇しくラヂオに響く行進の曲は聞きけり大戦果揚る」。

その裏の11とノンブルがあるページにはやはり抹消線の×と3首——「断種して癩根絶をせよと叫ぶ人は靈魂のことは言はざる／紅萩に止まる胡蝶を吹き払ふ微風もなく午後静かなり／微発の船つゞき行く夕暮れに望遠鏡^{めがね}を持ちて浜に下りけり」。抹消線が引かれた2ページ分の短歌は、かつての下書きか。

つづく左ページは、さきの「習作」のつづきか——「埋れ木となりて悔ひなし癩院に朝夕祖国の栄え祈らむ／慎ましく気高く咲ける^{マンゴー} 菴羅（樹）の花に揚羽の蝶は眠れる／御仁慈の深きを想ふ長さやかりんの花を視野近く見る／菴羅樹の花眼^{まみ}近く仰ぎつつ大御仁慈を新に想ふ／醜翼は明治神宮をけがしまつるこの仇撃たず如何で死すべき」——いま80歳台になる在園者から、かつて園内でマンゴーをつくったことがあると、去年聞いた。戦時下にもそうした栽培があったのか。

第3首と第4首の欄外に異筆で記号「※」の追記あり。

その裏にも短歌3首、手はさきの菴羅樹などの歌の筆跡に似ている。ページノンブルが2とあり、おおきく×の抹消線がある——「ちりすてに行く浜遠く潮引きて冬陽寒々砂に光れり／浜砂に坐して写生をする児等は皆沖に行く船を書きをり／漁舟一つ引き揚げてある浜砂の広々として昼顔の花」。

そのつぎも「習作」のつづきか、いくらかペンが乱れている、抹消線×もページノンブルもない——「瞳近く仰ぐに清し白藤の短き花に陽光和める／広前に祈る朝の空高う特攻

隊か編隊機飛ぶ／畏みて決戦訓を読む我に三千年の血潮流る／息呑みて世界戦況を聞き
みつゝ国土防衛の責務は想ふ／馬鈴薯の太芽に頼む物ありて蹲る背に陽光暖とし」。

その裏は、ページノズルが4とある原稿用紙に1首の短歌だけが記されている——「せりあひて蓼の花咲く下くゞり流るる水も秋づきにけり」。赤いインクによる傍線か抹消線がある。

そのつぎもやはり「習作」のつづきか——「神経の図太さは持て醜翼の飛ぶになれるは
赦すべからず／そのかみの悲田施薬を思ひつつ湯の花匂ふ風呂にひたりぬ／湯の花の匂ふ
湯槽にひたりみて悲田施薬の物語り想ふ／B29 過去りし後に警報鳴る空を憤激の目に仰ぎ
けり／島空を敵機通過の後にして警報の汽笛長々し鳴る」。

その裏の原稿用紙には、「歌集／^{まつかぜ}松籟原稿／昭和十二年」とのみ記され、×の抹消線が引かれている。ここにいう「松籟」とは、大島の療養所で歌人同人によってつくられた藻汐短歌会から謄写版刷りでだされた歌集の題名でもある。笠居誠一の編によって刷られたその歌集の発行は1944年だった。この原稿は刊行にむけた準備が1937年にすでに始められていたことを伝えているのか。

そしてまた「習作」のつづきとおもわれる短歌——「白髪の老はマツチを持ちながら煙
草呑まむとレンズをさぐる／白髪の老がレンズの火に呑める煙草の味は又別と言ふ／大君
のみ生れを祝ふこの佳き日陽に輝きて木の芽匂へり／植込みの楠の梢にかゞやきて萌ゆる
芽赤う視野にあまれる／空低う旋回をせる醜翼を闇になれたる目に睨みけり」。

ページノズル45に短歌3首——「紅萩の花にさやさや風生るる夕べの芝生を盲歩けり
／急降下せると思ひしたまゆらの機影は光る海の遙かに／穂芒に白き風ある夕昏れの〔かわら〕 磧
に蜻蛉吹かれ飛び交ふ」。川のない大島に、石の多寡はともかくも川原はない。海岸の砂原を「磧」と表記したか。

泉 そのつぎは、表裏ともに白の紙にかわって、泉俊夫「短歌詠草 敵機ほか」。

高高度飛翔す米機憎憎し引く雲のみが白く光りて／螺旋なる雲を引きつゝ悠々たり B29
一機の憎くき飛びざま／園樹々はなべて青葉となりにけりとみに楓のみどり冴えつゝ／

梅青葉ゆたかなりけるこの日頃ときをり児らの来てを見上ぐる／砲煙に見えぬ青葉の島
と云ふ南西諸島に思ひは沁むる／基地に咲く花は青葉に移りつゝ吾が攻勢のいよよきび
しと／防空情報止みてしづかとなりしとき山鳩のこゑのとほく聞こゆる／千万の敵機襲
ふもゆるぎなく護り抜くべき大和島根は／春雷は雨を呼びつゝ更くる夜や監視哨に立つ
療友の思ほゆ／廻り来る季節たがへぬ愛しさよつばめのこゑを今年もきゝつゝ／はろば
ろと戦火の洋ゆ越えて来し小鳥のこゑの沁みて愛しき／洋杳し越へ来し鳥の啼くこゑや
やすらぎに似しひゞきこもらふ／年年に老ひ給ふらむ母上としのぶ夜を＝つ五月雨の音
は／十年余も相会はざるを沁み沁みと思へば恋ほし老ひ給ふ母／かへるなき吾れの替り
も兄上よ老母を頼むと願ひひそかに

泉の短歌は2枚の紙4ページにわたって記されていた。どちらの裏面にもまた短歌が記
されていた。裏面のうた――

瞳を凝らす瓜の葉むらは匂ひたち艶やけき実の育ちつゝあり／桃ダリヤのいろ褪せなが
らさだまらぬ日和のまゝに夏たちゆくも／拾八年九月詠草参首〔赤インク異筆〕／ひね
もすを南風吹きあげて島山の松の秀むらは盲の＝みたつ／いずこよりいで来し蝶か白々
と寂かに翔べり時化過ぎし朝を／時化あとはとどろくと磯波の白白とのみ闇に砕けつ／
拾八年拾月詠草四首〔赤インク異筆〕／大君の御楯と征かす先生の御言葉強く心にひび
く／磯づたひゆく舟の上に積みあげしぬれ藻きらきら夕陽をはちく／朝明の風ぎしづも
れる海面に網繰り入るる水高の盛む／引き網を繰り入れてゆく舟あしの速しとも速し櫓
声とともに／拾八年拾壹月詠草七首〔赤インク異筆〕／現つ神しろしめすなる日の本を
謀らむとすもあわれ敵ども

もう1枚の裏面――

独立に身はなげうちてガンヂのいぎりすに迫る気魄するどし／拾八年六月詠草四首〔赤
インク異筆〕／艶々と赤き鉄みをふり翳す蟹一つみて山静かなり／乏しきに慣れて清し
むいたつきや狭庭は百合の咲き初めにけり／精根のあらむ限りを闘ひて闘ひ抜きて玉と
砕けしが／おちこちに咲き残りゐて丹つつじの青葉嵐に保つくない／拾八年七月詠草

七首〔赤インク異筆〕／仰ぐ瞳にかぎろひしるしましぐらに翔けりゆく機は光となりつ
つ／爆音は風にまきつつ真昼陽のみなぎろふ空に機影まぎれぬ／鯿はねてしずかとなり
し海の面は朝明けの色のやゝ映ろえり／島空を動き寂けき白雲のおもむろにして盛りあ
がりつゝ／船笛の鳴りの太しくひゞきつゝ朝霜はやゝはれゆかむとす

喜田 喜田正秋「自句自解（三）」は、「梅雨寒や板戸にうつる宿の炉火」をとりあげた。「一読すれば直ちに中七以下の「板戸にうつる宿の炉火」により、これが普通の宿ではなく何処かの高原か、若しくは山村の宿であることが解ると思ふ」とのこと。これは自分の体験をふまえたか、まったくの空想か。

喜田はまた「俳句作品」5句も載せた――

鋤初や丘の上なる新畑／胼の手に病友守る壕を掘励げむ／老連れて闇の退避や風冴ゆる
／雪折や藪をそびらの大藁家／初富士や神州不滅の感あらた

富士のみえない島で、それを想像しながらのこころの誓いか。末尾に「第二、三句面白いと思ふ」との異筆あり。

喜田の「俳句作品」は柁目が印刷された原稿用紙の裏に記されていた。原稿用紙の柁目には、「かしこ」で終わる文章がある。手紙か手紙様の文章の下書きか。

大原 大原枝風の俳句10句が、「No5」と手書きで記された縦罫紙に記されている。

皇恩に甘んじ今日も朝寝かな／卯浪立つ岬に機雷の監視哨 ◎／袷着てくつろぐ今日の
浪花節 ◎／壕堀りに蟻のよぎれる明さかな／武者人形前にどたばた子等荒ぶ／武者人
形夢をむさぶる子等に更け／松蟬や機雷監視の日誌書く ◎／新樹映ゆ監視日誌に異状
なし ◎／監視事務ゆづりて若葉山を辞す ◎／若葉雨監視カツパに打たせつゝ◎
機雷監視の五句どれも面白いと思ふ、監視日誌、監視カツパの句は独立性なき故工風を
要す、殊に監視カツパはもっと語を考へる要なきや。（後記へ）

――「◎」と、最後の「◎」以下の記述は、インクの色とペンが違ふとみえる。林による記述か。

松田 松田美津夫「長詩」／“靈波はおどる”は、原稿用紙（「No.23 10×20」の印

字) 9枚におよんだ稿の末尾に「昭和二十年四月七日完成す」と記された、まさに長編詩である——

朝日の直射し／夕日の直照る瑞穂ノ国／香る歴史は三千年／皇国民ぞまさに一億／其の一人として生れいで／みちあふれたる恩恵に育くまれ／人路のやゝに見え初むる頃／不治の日蔭に思ひみだるゝ……／よりも選つたる病情は／生みたる者さえ近かよらず／心つめたき白眼視／のがれきたりし青松の里／皇恩さらにあふれみち／感涙むせび朝な夕／迎えて送る数星霜／松のみどりに夢結ぶ／東亜をゆるがす大津波／孤島の岸べに余波荒れて／ついには夢のさめにけり／さめて短かき夢の跡／ふりかへる隙さえあらばこそ／我等も彼に備えなし／祖国と共に立ちあがる／心意気をば人知るや……／斯くてはならじとめざめたる／心の眼に映らふは／天が下にぞ比類見ぬ／建国以来の大理想／八紘一宇達成に／皇民一億出撃す／燦たる誇り香ぐわしき／神勅かゝげし大艦隊／日常生活百八十度／皇土の塵芥も心で生かし／物心総力大動員／時しも我等なにすべき／守るに守る砦なく／手足まとひとならぬため／心をくだく是のみが／忠義の業のすべてかや／かゝる悲憤に涙する／涙の跡をぬぐわんため／やさしき魂のおとずれに／祈りせよやとのべたまふ／実にやしかりとうけがふも＝／誠祈りのなになるか／得知らぬ魂も数あれば／拙なき言ノ葉散りもする／おろかなれども我も亦／祈心はたやさねど／なほも心にみち足らず／狂ひもだゆる情想を／つたなきペンに記さんと／あらぬ望みにかけられて／ついには斯くぞつゞりゆく／言葉のあやのあやしきよ。／岸べに狂ふ波の様／えも良くにたりと歴史はのぶる／戦ひ勝ちては起り立ち／立ちてはほどなく敗れたほるゝ／むなしき様をくりかへす／さなかにひとり此の国のみ／敗れしおぼえ^{イマ}現在だなく／伝統清き誇りを保つ……／国を愛する情しげく／かたより想ふにあらねども／神勅しかとおしかざし／大義の^{ワダツミ}洋海さ渡るに／神助如何をつゆうたがわじ……！／外なる人は知らねども／内なる魂のさけびをきけば／勝ずば止まじ如何で止むべき……！／今日知る者は明日を知る！／先ずは古きに学ぶべし／＝おそれ多きことなれど／上皇御躬を国難に／賭けさせ給ふと拝したる／時宗心中そも如何に＝／靈波おどれば雲を巻き／実に神風の

偉大さよ。／驕敵ほざく夢語／戦後日本処理案を／『見たか聞いたか！』さりながら…
 …／＝維新当夜の国情に／勝、西郷、なかりせば＝／信じて拝せよ天命は／時局時
 局にふさわしき／誠の人を現世に賜ふ！／神の試鍊を受くる者——／やゝにとゝのふ歩
 調さえ／いまだおぼつかなわが国を／土足にかけん無謀さは／しのぶにしのべず立ちあ
 がる……／日清戦争結末を／三国干渉受けしたため／血涙のみし此は恵み——！／天が下
 ！良からざるなし——／韓国併合の業なされ／露国のねたみ火を放ち／戈取らざるを得
 ざりしが……／＝多難にしのぶ者強し＝／勝利の光栄になひ立ち／今ぞ！！世界に
 かくれなく／国柄示めず時機きたる！／すぎこし方をふりかへり／見るにはいとも頼も
 しき／神建て給ふ国柄を／まもり育ててし伝統美！…／賭して惜しまむ大理想。／東亜
 の共栄志ざし／起せる歩みはゞむ者／道義の戈先き受くるべし……／伝統清し三千年。
 ／きたえきたえし日本魂！／いかでひるまんひるまじと……／戦ひつゞけ刀折れ／矢つ
 きし今は斯くすべし！／たほれし後も皇国まもる／アツツ、サイパン、大宮の／玉碎勇
 士の忠烈さ！！／実にや緒戦の大勝も／物量の力にやゝおされ／心ならずも今しばし…
 …／彼等のなすを許るせども……！／見よや必死の体当り／神風隊のいさぎよさ／皇民
 一億誰しもが／選び取るにはあらざるや。／神助頼めと言わざれど……／我等が一念こ
 る時は／靈波はおどり物は生き／只だ一発の砲弾も／射手の心をそのまゝに／全能力を
 はつきする……！／かゝる事実を知る者が／いかで己をうたがふぞ！！／一度び戈を取
 るからは／勝敗いかにを案じ見る／心はすでに敗ぶれたり＝！！／神旨を奉じ戦える
 ／国運まさにゆるぎなく／勝利以外になにがある！／天靈まします現世に／我は確信抱
 くなり／以上、／（昭和二十年四月七日完成す）美津夫

——わが身を「皇国民ぞまさに一億／其の一人として生れ」ながらも、「不治」にして、あ
 ろうことか「生みたる者さえ近かよらず／心つめたき白眼視」する病ととらえる。「東亜を
 ゆるがす大津波」とは、前年 1944 年の 12 月 7 日に発生したいわゆる東南海地震による津
 波を指すか。具体相は不明ながらも、「驕敵ほざく夢語／戦後日本処理案」への憤りをあら
 わし、また、「維新当夜の国情に／勝、西郷」といった幕末維新期の人物を想起し、「日清

戦争結末を／三国干渉」において、また、「韓国併合の業なされ／露国のねたみ」をも引きだして、現時の戦争への奮起をうながそうとしている。

だが、「一度び戈を取るからは／勝敗いかにを案じ見る／心はすでに敗ぶれたり＝！！」とは、なにをあらわしているのか。

笠居 笠居誠一「詩「空」——「燦々と降る／太陽の光／木の芽は伸びる／五月の空／若人の熱血は燃ゆ／紺青の空／征け若人よ／闘魂を／翼に乗せて／決戦の大空へ」は、謄写版刷りの原稿用紙に記されている。

その裏面は、活版印刷された「来週献立注文品」票で、「大島療養所」（活版）の「斉藤」（手書き）と「池田」（押印）から、「病室主任」（手書き）に宛てられている。日付は、1944年1月28日で、「卵（四日分）」が「計六名分」で「計二十四個」の発注である。

泉 つぎの泉俊夫「詩 涙」——

燦々と降り注ぐ初夏の陽射し／畑打ちにつかれた身体を／青葉の下に憩ひつゝ遠い将来を／夢見る私はまだ幼なかつた／汗ばんだ顔眉毛のあたりに／変なかゆみを感じた私は／何気なく手で撫でさする／すると三本四本と／手にくっついて来るのだつた／その瞬間私の脳裏を／過ぎ去つた／一つの黒影それは幾年か前／病気の為突然家出した／姉のあわれな姿だつた／眉毛が抜ける抜けるお母さん／眉毛が／私は夢中で叫び乍ら／家に駆け込み窯の前に倒れて／泣けるだけ泣いた／涙はとめどなく流れた／母は窯の前に座つたまゝ黙つてゐた／何時までも無言だつた／ポツリポツリ窯に木を投げ込むで／ある母／御母さん／泣けるだけ泣いた私は／堪え切れなくなつて呼んだ／けれど母は黙つてゐる／何時までも何時までも黙つてゐる／だが母の眼から／その頬を絶え間なく／キラキラ光りつゝ流れる／涙があつた、私は／その涙を／あの涙の輝やきを／永久に忘れる事が出来ない

——自分の発病時をかえりみて記した詩なのだろうか、そうだとすると、このとき、なぜ、当時のようすを記したのか？。

その裏面には、泉のさきの短歌のつづきが記されていたようだ——

雲り空雨となるらし黄昏を兆すいたみに堪へてこもりつ／明暮のみとりに慣れてかそかなる療友の気配にも耳さとくなりぬ／くるしみを訴ふ療友に吾がよれば熱の臭気のひたに匂ふも／六月詠草五首〔赤インク異筆〕／昨夜の雨にぬれし木肌ゆ射す光を清しみにつゝ松山をゆく／^{かえり}帰省ゆく療友見送ると来し磯に宵待草のここども咲けり／黄昏の浦曲しづけし断崖をせゝらぐ水の間には佇ずむ／葡萄葉の葉陰にひそむ露ありて朝を鋭く光り耀ふ／歩みゆく夕の磯ゆほのかなる油煙にほへり船ゆきたらし／拾八年四月五月詠草拾参首〔赤インク異筆〕／朝の陽の光り寂かに宿したる青藻の磯を親しみてあゆむ／雨止みて次第に明る外の面よりラジオが歌ふ声さやかなり

子どもたち 謄写版刷り原稿用紙の罫目を子どもたちの文字が埋める。高2松本常二「精神一到何事かならざらん」、高2大西哲司「飛行雲」、初6畠山一義「卵」、初4須内キヨカ「炊事」、3年庫元久子「ふろ」。子どもたちの作文には、添削と感想や講評が記されている。林のペンか。

そして水彩画へとつづく。高2大西哲司は、1本の道とそのむこうにかさなる山々を描く。高2戸田次郎は、蕪と人参とそら豆（か？）を描いた。高2岡崎安彦は橋、それはわたしには、神田川にかかる聖橋に見える。初5中島徳吉が描く海戦は秀逸。初5中井八千代の絵には、1本のおおきな木、原野の草花、家いく軒か、空には鳥、あちらには山。

てっちゃん ここでも、てっちゃん作品をとりあげよう――

遊時間に僕等は、ひなたぼつこをしながら字を書いて遊んで居た。／すると、松本君が防波堤の上から、／「おい、B29だ飛行雲が見えるぞ」／と、大きな声で言った。見ると東南の上空を、一機が、へびが這うたあとのように、ひねくれた飛行雲をひいてゐる。先生に言つてあげると赤沢先生が一番に飛び出して来た。そして、／「今日のは、はつきりと大きく見えるね」と言はれた。僕が先生に、あの飛行雲は何米ぐらいの高さですかと、言つて尋ると先生もわからないと見えて、／「さあ」／と言つたゞけである。／僕は飛行雲と言ふ物を、大島で雑誌などをよんで始めて知つたのである。／又、こんな大きな実物を見たのも、始めてである。飛行雲はほんとに、不思議な物だと思つた。／

飛行機は兵庫の赤穂の方へ、飛行雲をひきながら飛んで行った。／以上。

子どもは鉛筆で書き、それとは違う赤インクのペンで、「良く書けてゐる。字もきれいだ」とある。

一 等 「これは今度の作文で一等です。／卵を戴いた喜びがあふれてゐます。／終りの結びも甚だよい。おもひきつては素張しい。これはラヂオ放送に価する。勉強せよ」と褒められた畠山の作文もみよう――

此の間久し振に卵の配給があつた。／もらつて来て食堂のこの間に置いてある。御飯をたべる時わければいいのと思つてまちどうしうがつた。其のあくる日の三時ごろおとうさんが「炊事当番わけよ」とおつしやつた。その時ちやうど僕と山口君と炊事で山口君がこれはだれかといふ役になつた。僕はだれそれだといふ。全部わけて皆んな取つて下さいよといつた。するとみんなどやどやと来て自分のを取ていつた。汁に入れるものもあつた。僕はゆがいていつとき水に入れておくとすぐからがむけた。おいたのを机の中へ入れた。食べるのはおしくて机ひきだしを何回もあけたりしめたりした。するとみんなはもうたべていた。みんながたべたので僕もおもひきつて食べた本当においしかった。／をはり

傍点と句点は、おとなのペンのようだ。

庫 元 須内の作文で、「あとの庫元さんのを読んでもっと細かに出来事を書く練習が必要です。／句読の事も庫元さんへ書いた注意を御らんない」と、手本とされた庫元の作文をみよう――

私の家はふろはありませんでしたので、たんこうのふろにはいりに行きました。ふろは毎日三時にあきます。／ある日ふろに行きました、ふろは三人しかゐませんでした、私の兄弟は四人です、私達をよせて七人しかいませんでした。／ふろはこすつてあがるころもちやんとありましたので、中ぶろでおよいでいましたらふろやのおばさんにしかられました。それで私達はいそいであがりましてのでこすることが出来ませんでした。かつてお母さんにそのことをゆふとしかかられましたのでまたばんふろに行きました。／大島

のふろに行くとは私は〔6字判読不能〕たので私はすべりました。そしてはいつてみるとふかいので私は湯が少ししかない時はいろいろと思ひましたのでまつていたら湯はすくなくなりませんでした。／をはり

この「ふろ」体験は、生家にいたときのことだろうか。これへの講評は、「三年生でよくこれだけ書けます。細かに書いてある処大変良い。これからもよく物事を見て詳しく書いて御覧なさい。句読点は。は勿論よくよんでみて息を入れる所に、を打つ」とあった。

なお、子どもの作文のなかの句点は多くのばあい、この講評者がつけたようだ。

青葉の窓にて 泉俊夫の稿は、その末尾に「青葉の窓にて」と記されているだけで、表題はない。1枚の藁半紙の表と裏にそれぞれ2段の文章が記されている。

◎雨毎に夏めいて来るこのごろ防空に監視に私達の任務は重い、島畑には馬鈴薯、トマトの大増産を目指して働いて下さる御百性さん達の姿が見られる／◎沖縄の決戦はいよいよ熾烈化し白熱化して来る時に月日にあがる大戦果、然し其の陰に挺身死闘をつゞけて下さるもののふのあるを、又今日今も敵艦に突入しつつあられるであらふ神兵のあるを夢にも忘れてはならない／そして其れらの方達に愧ぢない日月を生きゆく事こそ吾々病者の道であると思ふ／◎ドイツは遂に屈服した、然し其の災に微動だもする日本でない事を断呼首相は世界に宣言された、誠に頼母しい次第です／◎原因不明の熱からやうやく抜け切った五月一日の昼、冬支度に鉢巻までしめ込むで庭に佇つてみた私は通り掛つた土谷さんから本号の編輯を頼まれた／生来不器用それに字が下手なので一応辞退したのであるが強ひての御頼みなので引受ける事とした、何しろ初めてなので不行屈の処は御許しを願ふ／◎本号に長田さんの原稿を頂く事の出来なかつた事は誠に残念であつた、承はれば身体の調子が少し悪いとの事、何分共御自重の上充分御静養下さいませ様に／◎青葉の駅をつゞがなく青松号を発車さす事が出来た事をよろこぶと共に次号への皆さんの敢闘を期待して止まない／青葉の窓にて／泉俊夫

——第8号担当者の後記だった。とり仕切りは、やはり土谷だ。

感想 3段に区切られた「感想欄」のその3段めに記載がある——

潮音中の一時帰省は全般の自覚に寄り全部が帰園せらるゝ様道義の昂揚に勉められ度／
防空壕並に監視哨に対する記事は洵に感激の至りにて厚く御礼申上ぐ／猶清濁併せて呑
むと云ふが願ては清のみになりて濁は除かれんことを切望す／未沢

——園職員が欄の端に寄せた感想だった。

その裏の3段のうち中段から「青山荘だより」が始まる。

◎泉兄の努力で本号も立派に出来た感謝する。表紙も随分苦勞して居られる。／子供さ
んの絵を見ても思ふが絵は他の芸術作品と同じくどこまでも写生から行かねばならぬ。
どんな下手でも写生したのは生命が入る。／私は今食後にそんな事を思ひ乍らスケート
ピーを一輪切ってきて十何年ぶりで絵を書いてみた。子供のクレヨンを出してきてね。
／矢張り面白い。一片の花びらにも無数の色彩がこもって居る、出来栄えは甚だまづい。
併しこれを見て誰も臨画とハ思はない。写生である事がすぐ解る。わづかでも心が入っ
て居るからである。写生をおすゝめする。／◎連作の中の短歌俳句の一つ一つの独立性
〔異筆で傍線と「一句一首」の追記〕と云ふ事が八釜しい。枝風兄の機雷監視の句で一
応それを指摘した。併し今朝ね乍ら考へたが独立させ得る時は問題ないが／新樹映ゆ監
視日誌に異状なし／の如きは機雷監視と入れるには長過ぎて仲々難しい。この様な場合
はこのまゝで良いのでないか。この連作をよんで来て誰もこれを監獄の監視日誌と間違
ふ人もない、たゞ何かに佳作を示すときにこの一首のみを出す事を控えれば良いのであ
るまいか。連作の面白さはかゝる欠点を補って余あると思ふ。／◎笠居兄のかりんの二
首（※印を余が下につけたるもの）の如きは連作と云へずどちらか一首にすべきもの
と思ふ。連作には進行がなければ意味がない。同じ様なのを二首並べてはつまらぬ。／併
し私はこれを見て一つの示唆を受けた。（上段へ）／下段より／それと云ふのは矢張り青
松の特色として二首のうちどちらが良いか迷ふときはどちらも書いておく。そして原稿
の終りに「自分ハ迷つてゐる旨」書いておき読者は次号に考をかく。／藻汐草で出来な
い事を青松でやる。回覧誌にはこの利点があるぞと云ふ事を次から次に考へて進む。そ
こに進歩があり希望がある。／◎斉木兄の努力感謝、御平癒を祈る。二十そこそこの若

人と思って前に批評し先日初めて廊下で御目にかゝり相すまなく思った。若々しい御努力を謝す。父上の描写よし。／◎長田兄の為祈る、早く癒されて予言者の咄を聞かせて下さい。／◎土谷兄劇務の中に創作。その意気に敬意を表す。

——この林の稿は、3段のうち中段から始まり、ついで下段へ、そして上段へと文章が移る。下段の左端には、矢をつがえた弓の挿絵が、上段右端には的を射た矢の挿絵がある。これもまた林の絵心のあらわれか。

その林が記した、「藻汐草で出来ない事を青松でやる。回覧誌にはこの利点がある」との指摘がとても重要。

最終ページ 貼られた紙片に、「医局「藤の花」輪読会」の表題があり、俳句記載——

スキーとピーコップに生けて開会す／銀盆にスキーとピーのコップかな／講習生みなお
 かつばやスキーとピー／スキーとピーかこみて会のよかりしこと／輪読が終りて若葉の
 歌うたふ／縞かやをそへてスキーとピーの束／スキーとピーもちゆく使は子ら競ふ／香
 をかぎつスキーとピーのおつかひに／スキーとピー子がもちかへり留守なりき／出勤の
 カバンにスキーとピーの束

これらの句の上下には横に線が引かれ、ほかの記述とはっきりと区切られている。その左に「歛すてゝスキーとピーに来て憩ふ」の1句と、「泉兄ニ刺戟サレ東風写生／18/Vノ20」の文字と、さきの「青山荘だより」にあったとおり、林によるスキーとピーのクレヨン画。

1945年5月18日の写生か。

裏表紙に文字はない。